



# 季刊 防災ニュース

2012.3  
第15号

宮前区役所地域振興課／宮前区まちづくり協議会防災部会

平成23年度

## 宮前区防災フェア特集

川崎ではめずらしく雪が降りしきる1月20日、  
宮前市民館で平成23年度宮前区防災フェアが開催されました。  
今年の防災フェアは、東日本大震災に関連した講演・展示が多く、  
あらためて、3.11のあの出来事に思いをはせ、  
災害に強いまちづくりを目指す気持ちを新たにしました。



講演  
大ホール

### 被災の体験と復興への想いを語る 宮城県南三陸町 語り部の会 後藤一磨氏

今年は、東日本大震災で町ごと全てを津波で流された宮城県南三陸町 語り部の会 後藤一磨氏をお招きし、被災体験と復興への道のりをお聴きする講演会が大ホールで行なわれました。例年、映画上映をしてきた広いステージの上に一人で静かに立ち、何の演出もなく、素朴でゆっくりとした語り口で語られるその一言一言は、聴くものの心をとらえ、私たちの中に、深く、重く、響くものでした。

マグニチュード9.0の大地震が起こった3月11日午後2時46分から津波が町を襲い、全てを海に流し去る一刻一刻を描写する言葉は、津波を目の当たりにしたものでしか表現できない緊張感のあるものでした。

「堤防がある事を感じさせない、走ってきた津波がそのまま陸にスーッと入ってくる。そういう状況でした。速さは、たぶん

40～50km。堤防を超えて陸地に入ると堤防沿いにあった家をまずなぎ倒していきます。木造の家は、柱がへし折られます、パキパキ。それで屋根とか2階が下に落ちて、その頃には10mくらいの高さになって、その波は渦巻くように家を呑み込む、解体する、もうざくざくに砕いていって状況でした。」

後藤さんご自身の家も、目の前で津波に流されました。その情景を語る言葉には切なさかじみ出ていました。

「もう持ちこたえられないよって感じで、ぐらっと傾いて、ふっと浮いたみたいになって、そのままの姿で波に流されて、西の方に流されていきました。そして、返り波で茅葺き屋根はそのまま全然崩れることなく津田木島っていう島の沖へ姿を消していったんです。」

その夜は高台にある小さな神社で、避難した方たちと焚

き火をおこして暖をとったそうですが、気仙沼が燃える火や、そして繰り返し襲う津波でまんじりともできない一夜を過ごしたそうです。

「津波が来るたびに、バリバリバリ、ボキボキボキ、そういう音が激しくする。水の中の建物に残された人に聞いたんですが、津波は翌朝までの間に、陸に上がってさまざまな壊すような大きな津波は9回」

少し大きな避難所に移動してカーラジオから入る情報をたよりに、救援を求めて役場機能がある場所まで行ったり、地域の人たちと力を合わせ避難生活を送り、4日目には海上自衛隊の大型ヘリが、5日目はアメリカ海軍のヘリが救援物資を運んでくれました。二次避難をした町の人たち

からの暖かいもてなしを受け徐々に気持ちが救われたようになる中で、後藤さんが強く思ったことがありました。

「私たちは家がなくなり車がなくなり、全てのものが流されて、なあんにもなくなったと思った、でもふっと我に返って考えてみると、いろんなものが残ってたんです」

「がれきを乗り越えて古い友達とか知ってる人たちが両手にさまざまなものをさげてきた。顔見合せて涙を流しながら、「よかった、よかった、どうもありがとう」と抱き合う。津波はそうした人間関係“絆”までは流せませんでした」

「はあ、津波震災はとっても悲惨なもので耐えようのないものだったけれど、津波が震災が気づかせてくれたものもあつたんだなあ」



まだ解決への道も拓かれていない原発問題にも触れ、今回の一連の災害は、自分たちの欲望で便利で楽な生活を追い求めてきた人類への大自然からの警告だ、と感じたともおっしゃっていました。

「学者は“想定外”というふうにこの震災を言います。想定外ってなんですか。そして、人間の知恵はそれほどまで素晴らしく、自然を超えるものなんですか。私は、NOというほかない。もう少し時代を経たら今度の津波以上の震災が起きないという保証は、どこにもございません。私たちは、自分の技術とか知識とか、そういうものにおごって、自然ときちんと対話する方法を忘れていたのではないだろうかと思えます。そして私たちに“人間！お前たちこのままでは滅ぶぞ！気づけっ！”と、パシンと怒鳴られた」

防災フェアに向けての後藤さんからの助言もありました。「自然災害は防ぎようございません。ただ、自然災害の中に見える人災の部分、自然を畏れないで逃げることをしなかった、甘くみてトップリーダーが避難指示を出さなかった、さまざまなことがございます。その人災の要素部分だけを消すこ

とが、たぶん重要なことだろうと思えます」

「大きなことが起きると、私たちの頭、パンクしちゃいます。忘れたんではない、そのことによって順番通りにいかない、自分の思考が停止する、そういうことがさまざま起きます。そのことを分かりながら、その災害にどう向かうかを、ここでも話し合っただけでいいことが大切なのではないだろうかと思えます」

ご自分の故郷、南三陸町が復興にはまだまだほど遠いという状況の中で、

「震災から教えてもらったこと、それを震災の被害者にならなかった人にも共有をしていただいて、これから生きる道しるべを共につくっていく。それにはまず震災がどうであったか、それから何が被災した人に見えてきたのか、そしていちばん大切な命を次の震災に備えるためにどう伝えるか」

という想いを、語り部として各地で語り続けている後藤さんの“生き残った、生かされたものとしての使命感”が、聴いている私たちの胸をうつ1時間半でした。

★後藤さんの講演の全文をホームページに掲載しています。  
「防災ニュースのページ」(裏面参照)にアクセスしてください。

講演  
大会議室

## 東日本大震災の現場から 宮前消防署員による活動報告

神奈川県隊の第2次派遣隊として、3月14日から18日まで現地で活動された、宮前消防署警防第1課の早川署員の報告を聞きました。

「集結場所は犬吠訓練場で、3月11日の夜から多くの隊員が集結しました。川崎から派遣された隊員は、主に仙台車で活動を行いました。現地へ向かう高速道路はところどころひび割れていましたが、支援に向かう車両が通行できるように、上の方で簡単な舗装がされていました」

「実際に現地での救助活動は、“72時間以内ならば、生存者がいる可能性がある”という消防のセオリーのもと、懸命な捜索が行われました。その結果、第1次派遣隊が屋根に残っていた3名の要救助者を救出することができました。その後も救出活動を継続しました」

「また、別の隊の話ではありますが、沿岸部では、海の砂が混じった汚泥のせいで、大変歩きにくく、活動場所まで進むのに時間がかかったそうです。その活動中に津波注意報が発令され、至急退避せよとの通信が入りました。しかし、避難できるような高い場所はないし、足場が悪いせいで、戻ることもできませんでした。仕方なく、がれきの中にあつた屋根の上に退避しましたが、生きたこちがしなかったそうです」

悲惨な状況に大変なショックを受け、いっとうに進まない作業にもどかしさを感じた消防署員の、現地での無念の想いが伝わってくる講演でした。



## 宮前区防災フェア

講演  
視聴覚室

## ペットと防災 日本愛玩動物協会理事 平井潤子氏

東日本大震災の現地でペットの救援活動を続けていらっしゃる平井潤子氏を講師としてお迎えした「ペットと防災」は、多くの具体的な事例を交えながら、飼い主の心構えを分かりやすく解説していただきました。

いざ避難という時に役立つのがクレート(ハウス)トレーニングで、ペットがゲージに入り慣れていれば安全に避難できる確率が高くなり、避難所でも他の方の迷惑にならないので日ごろから訓練しておくのと良いとのことでした。

それでも避難できずに行方不明になった時は写真が有効なのですが、今回の被災現場では携帯電話に保存してある愛犬、愛猫の写真がたいへん役に立ったそうです。



一方、避難所ではまだまだペットの居場所がなく、車の中で熱中症になって命を落とした短頭種(バグ等の鼻がつぶれている犬種)の犬がいたなどの悲しい事例や、ペットと一緒に避難生活が送れるような避難施設の確保の活動や、赤坂プリンスでのペット同伴での生活の様子等のレポートがありました。

講演  
視聴覚室

## ぼうさい出前講座 川崎市総務局危機管理室職員

視聴覚室のもうひとつの講演は、危機管理室の職員からの「ぼうさい出前講座」でした。出前講座は、川崎市が行う防災対策の説明や、各個人・家庭でできる防災対策の解説等を行い、防災に対する理解と関心を深め、防災意識の高揚と地域の防災力向上を図ることを目的としています。

今回も日ごろの備えや家の安全対策、備蓄品・非常持出袋の基本的なことから、地域で協力し合うことがいかに災害時に役立つかなど、市民が最低限押さえておくべきポイントを説明していただきました。

防災の意識を広める取り組みとして、子供や外国人の方にも読めるように全てひらがなで書かれた「そなえる。かわさき(やさしいにほんご)版」(下写真)も紹介されました。

この出前講座は市内で行われる防災関係のイベントなどで行われることが多いので、繰り返し聴講して、防災のポイントをときどき確認してほしいとのことでした。

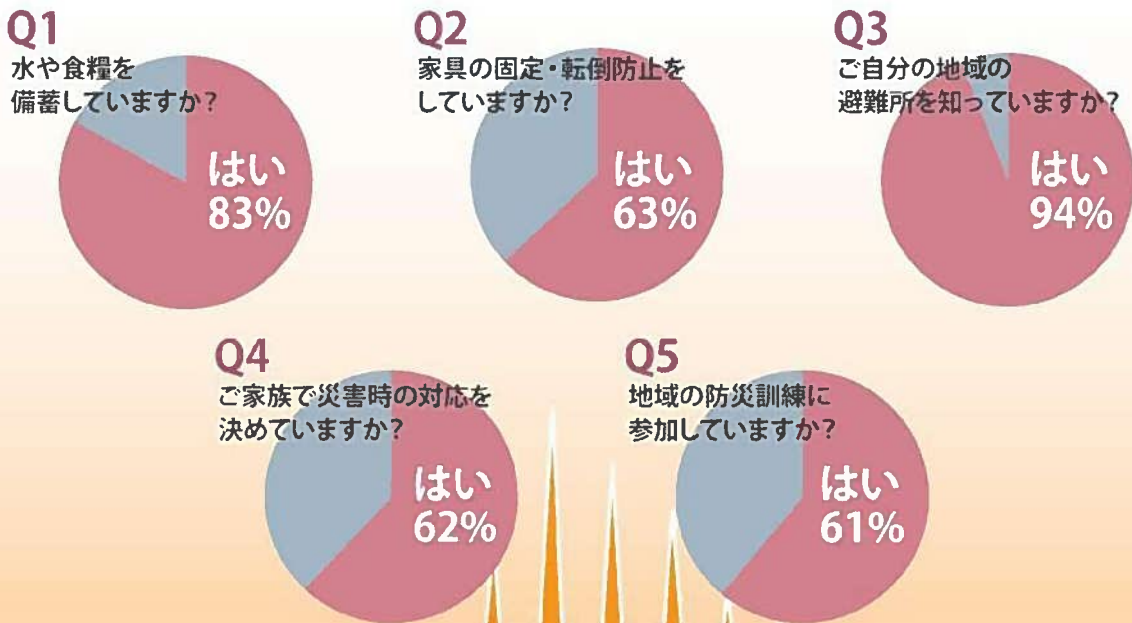


アンケート  
結果

## 入場者の方を対象に行った アンケートの結果を報告いたします

今回の防災フェアでは、アンケートに235通の回答をいただきました。

下のグラフに示した通り、来場者の多くが各家庭で防災対策を行っているとのことが分かり、震災後の防災意識の高まりを感じさせます。細かくみると、Q1では3日分の備蓄をしている人が59名と最も多く、次いで2日分が31名でした。中には、10日以上分の備蓄をしているという回答もありました。Q3については、かなりの認知度がありますが、Q2、4、5については、まだまだ改善の余地があることがわかりましたので、解決策を模索していこうと思います。



### 宮前区防災フェア

#### 防災フェアへのご意見・ご感想

- 「実践的なプログラム(体験、訓練など)を行って欲しい」
- 「休日に開催して欲しい」
- 「子ども達も参加できるプログラムがあると良い」
- 「実際の経験という、貴重なお話を聞くことができ、命について考えさせられた。」
- 「最前線の活動のお話は、リアリティがあり、様子がよく伝わってきた。」
- 「写真の展示を見て、東日本大震災の壮絶さを感じた。」

この他にも、さまざまなご意見をいただきました。ありがとうございます。

皆様の貴重なご意見を今後の防災フェアの参考にさせていただきたいと思っております。